

夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

(第14回)

パッティ・コンサート

森鷗外は留学先のドイツで、オペラを数十回も観たし、コンサートへも行った。漱石は音楽の本場ロンドンで暮らしたが、オペラに関心をもつことはなかった。しかしコンサートは、ただ一度だが、行った可能性がある。寺田寅彦に宛てた手紙のなかに、次のような一文がみられるからである。

明日の晩は、当地で有名なPattiと云ふ女の歌をアルバート、ホールへきゝに行く積り。小生に音楽杯はちとも分らんが、話の種故、此高名なうたひ手の妙音、一寸拝聴し様と思ふ。(1901年付の漱石の書簡)

漱石は「行く積り」と書いているので、実際に出かけたのかどうかは断定できないが、1901年11月21日のコンサートとは、どんなものだったか、漱石が聴いたのはどんな音楽だったのか、知りたくなった私は探偵きどりで、当時のロンドンの新聞を丹念に調べてみた。すると、11月2日のタイムズ紙に、手がかりになる予告記事を見つけることができた。

「明日の晩」と漱石が記したように、開演は夜の20時であった。今シーズンのロイヤル・アルバート・ホールにアデリーナ・パッティ (1843-1919) が出演するのは、この日だけという貴重なコンサートであった。グランド・イブニング・コンサートなので、出演者はパッティだけではなく。当代の人気歌手4人の名が新聞には載っていた。のちに偉大なピアニストとして歴史に名を

残すヴィルヘルム・バックハウス (1884-1969) の名もあった。当時、弱冠17才である。スタインウェイ社のピアノが使用されることも告知されていた。

コンサートの翌日のタイムズ紙には、かなり大きなスペースの批評を読むことができる。

パッティはグノー作曲『ファウスト』のなかの aria 「宝石の歌」など、得意の3曲を歌い、アンコールでは鳴り止まない拍手に応じて、5曲も歌ったという。そのなかには彼女のアンコールの十八番である「ホーム・スイート・ホーム」が、もちろん含まれていた。評者は、彼女の透明感のある魅力的な声が全盛期と変わらぬことを喜んでいる。

とにかく、「話の種」になることが満載のコンサートだったようである。

ところで、三浦環 (1884-1946) は海外で認められた最初の日本人歌手である。彼女のロンドンデビューは、1914年10月24日、赤十字主催のロイヤル・アルバート・ホールにおける^{じゅっぺい}恤兵音楽会であった。そこには72才のパッティもいた。1899年にスウェーデンの男爵と3度目の結婚をしたパッティは、男爵夫人として慈善活動をしていた。第一次大戦の犠牲者のために、彼女は「ホーム・スイート・ホーム」を歌ったが、そのビロードのような声に心がとろけた、と三浦環は自伝で回想している。以後、パッティは公の場で歌っていない。